

賢治から、  
あなたへ

ロジヤー・パルバース・著  
森本奈理・訳

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み



# すべてのものは、おたがいにつながっている——『インドラの網』

## 動と静が同時に存在する物語

賢治にとつて大切なのは物語の内容だけではありません。物語を包んでいる自然、特に、わたしたちの願いや希望をおたがいに伝えあう光や、風を運ぶ空気も大切なのです。

賢治の詩や小説を読むときはいつでも、風や空気の描写によつて生み出される物語の背景や雰囲気に、しつかりと注意してみてください。これから紹介する『インドラの網』という物語（P.31）を理解するためには、このことが特に大切になると思います。

『インドラの網』で注目してもらいたいのは、賢治が動と静を同時に創り出していることでしょう。

これは、本来絵画が成し遂げてきたことです。

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの『星月夜』を見てみましょう。この絵では、空の幻想的な運動の一瞬が見事に捉えられています。

さらに、ヨハネス・フェルメールの『牛乳を注ぐ女』も見てみましょう。水差しから注ぎ出されている牛乳の「動」の一瞬が見事に捉えられています。

これら二つの絵を見ていると、まるでわたしたちまでが、動と静が同時に存在するような奇妙

な時間に捕らわれてしまつたかのような気持ちになります。

### 一瞬百由旬を飛んでいるぞ。

この物語の文中には、天人てんにんが翔ける様子を描いたこのような表現が出でますが、この天人は一瞬で何百キロも移動することができるので(文中の「由旬」とは、サンスクリット語の「ヨージャナ」を意味した、古代インドの距離の単位です。所説ありますが、一由旬は約七、八キロメートルといわれています)。しかし、すぐその次に、賢治は次のような文章を書いています。

けれども見る、少しも動いていない。

逆説的に見えるかもしれませんが、ここでは、時間が現在に静止していながら、未来へと流れ続けているのです。賢治の世界では、現在も、過去や未来とおたがいにつながつていてるからです。時間というのは、実は未来へ流れると同時に、ずっと現在にもどどまり続けるものだ、と賢治は捉えているのです。

幻想を見ている主人公の「青木あおき」は、コウタンという場所にいます。

コウタンは中華人民共和国新疆ウイグル自治区にある砂漠で、一八九六年から一九一〇年にかけて、探検家スヴェン・ヘデインとオーレル・スタインは、この地に紀元前二世紀から紀元後一

二世紀まで栄えた遺跡を発掘しました。日本でも、二十世紀初め、探検家で浄土真宗の高僧だった大谷光瑞おおたにこうざいが、仏教研究のためにこの地の探検と調査を行なう日本独自の特別チームを組織し、三度資金を提供しました。

この探検調査は当時、とても多くの日本人の興味をひきつけたので、賢治もこのことについて知っていたはずです。

青木は三人の天の子どもに出会い、その子どもたちはインドラの網をさし示します。この網の描写はとてもすばらしいものです。そして、再び(太鼓の音をかなでる)風と、まるで「反物質」のように、「マイナスの太陽(中略)暗く藍くらや黄金や緑や灰いろに光り」、大気に充満する色とりどりの万華鏡に、スポットライトが向けられます。

## 現在には、過去と未来が含まれている

『インドラの網』という作品は、賢治の目から見た宇宙の真理をわたしたちに垣間かいま見せてくれます。わたしたちは、この世界で起きるあらゆる現象や、過去や現在、未来とつながっているので、「いま」とは異なる時代や「ここ」とは異なる場所をながめることができます。

これだけだと、とても抽象的な言い方に聞こえるかもしれないのに、どういうことか、わかりやすい例で説明しましょう。

オーストラリア大陸のほど真んなかにあるキングス・キャニオンをご存じでしょうか？ 赤

い平野からそびえ立つ山は、まるで火星にある風景のようです。山登りが苦手のぼくにとつては、  
“Heart ハート Attack アタック Hill”(心臓破りの山)とも呼ばれているその山の五・五キロ登山コースはちよつと  
辛いものでした。でも、フライパンのような平たい山頂にたどり着いたとき、「ああ、やつぱり  
登る甲斐があつた」としみじみ感じました。

もちろん、そこからの赤い砂漠のすばらしい眺めに感動したからでもあるけれど、ぼくが何よ  
り興奮したのは、その山頂にあつた化石です。岩に埋め込まれていたのは、さんようちゅう三葉虫のみごとな化  
石でした。三葉虫は、およそ五億年前に海底をはつたり、泳いだりしていた節足動物せつそくどうぶつです。

つまり、オーストラリアの真んなかにあり、現在一番近くの海から一〇〇〇キロも離れている  
キングス・キャニオンは、大昔は海のなかにあつたのです。こういった「現在」の発見は、いつ  
か遠い将来にはここがまた海のなかに沈んでしまうかもしれないという「未来」を、わたしたち  
に思い知らせます。

もう一つ似たような例を、賢治の『銀河鉄道の夜』から挙げましよう。

空の旅を楽しんでいたジョバンニとカムパネルラは、約五〇〇万年前から約二五八万年前まで  
のあいだにできた、プリオシン海岸という場所にたどり着きます。そこには、長靴をはいた「学  
者らしい人」が科学調査を行なつていました。その学者らしい人は、二人にこう言います。

「——は百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね……」

つまり、「現在」の地球の環境を研究すれば、「過去」の証人のようなものがいつぱい出てくるのです。さらにそれを研究していけば、地球はこれからどうなるのかを予測することも可能です。特に地球温暖化が進んでいるいま、こういう研究はとても大事です。東京、ニューヨーク、シンガポール……、沿岸部にあるすべての大都会は、ある「未来」に、再び海に埋没するかもしれません。このように、わたしたちの「現在」は、わたしたちの「過去」と、必然的につながっているのです。

ところで、この文中には「ツエラ高原」という地名が出てきます。これまで「ツエラ高原」は賢治の創作だといわれてきました。でもぼくは、それはまちがいだと思います。「ツエラ高原」は、インド北部にあるヒマラヤ山脈の海拔四〇〇〇メートル以上の地点にある峠のことです。

## わたしたちは、想像力によつて、どんな空間や時間にも移動できる

賢治が生み出した世界、感じていた世界をひと言でまとめるなら、ぼくは「わたしたちがおたがいにつながつていてる世界 (interconnectedness)<sup>インターネクトネットネス</sup>」だと思います。

もう少しあわかりやすくいふと、生物であれ、無生物であれ、この宇宙に存在するものは、すべてがおたがいに密接に関係しあつていてる世界、あるいは、おたがいに密接に関係しあうことですか何一つとして存在できない世界、ということです。

一見したところ、賢治の世界は孤独に思えるかもしません。

事実、賢治は孤独な人物や動物について、詩や物語をたくさん書きました。こうした主人公はそれぞれまつたくちがう場所や変わった状況にいるのですが、どういうわけか、そこにそれ以上とどまれません。

そして、賢治の詩や小説の主人公は、みんな賢治の「別の一面」あるいは「別の自分」になっています。

ふだん、わたしたちはこの「別の自分」を意識することはめったにありませんが、それでも、そこには「本当の自分」が隠されていることもあります。だから、作家や詩人が「別の自分」を自分の作品の登場人物に仕立てあげるのはよくあることです。

賢治はよく、詩や物語のなかに、自分をそのまま登場させることができます。たとえば、『札幌市』という題名の哀しげな詩のなかでは、賢治は札幌のベンチにひとりたたずんでいます。また、賢治は比<sup>ひ</sup>喻<sup>ゆ</sup>的に「木」として作品に登場することさえあります(『何と云はれても』のP.49参照)。そして、この『インドラの網』で、賢治は人類学者「青木晃<sup>あおきあきら</sup>」の姿を取つて現れています。

『インドラの網』は、賢治の全作品のなかで、抜きん出てすばらしい描写がなされています。

この物語は、わたしたちに絢爛<sup>けんらん</sup>たる色彩の万華鏡を見せてくれます。

賢治のこの色彩の世界を見ると、ぼくはフランスの画家ポール・セザンヌの深い洞察力のある、次のような発言を思い出さずにはいられません。

「自然の本質はその外側にあるのではなく、内側にあるのだ。外側の色彩が内側も示している。色彩こそが世界の本当の姿を示しているのだ」

『インドラの網』で賢治がわたしたちに示しているのは、まさにこの「世界の本当の姿」なのです。

この物語は極楽<sup>ごくらく</sup>の入り口で展開していく夢の世界です。これを読めば、わたしたちはこう理解することができるでしょう。

自分の想像力をかきたてれば、わたしたちは生と死や、時の移り変わりについての真実を垣間見ることができる。

想像力を働かせれば、わたしたちはどんな空間、どんな時間にでも移動できるようになる。

これがこの短編で賢治が伝えようとした美しいメッセージの一つである、とぼくは思います。

わたしたちは、わたしたち人間しか持ちはないであろうこの想像力を仲立ちにすれば、空間、時間をも含んだこの宇宙のすべてのものとつながっていることを実感できるのです。

わたしのなかにあるものはすべて、あなたのなかにもある

インドラの網<sup>1</sup>というのは、仏教の思想家が三世紀に作り出した、宇宙の哲学的なイメージです。そこには、すべてを取り込むこの網の纖維のすみずみにまで、無数の露<sup>つゆ</sup>が存在しています。そして、その露はちょうど球形の鏡のような働きをしていて、目に見えるあらゆるものとできごとをそこに映し出しているのです。

そして、この無数の露のひと粒ひと粒は、この宇宙に存在するあらゆるものひとつひとつを

意味しています。

試しに、そのなかのあるひと粒の露(球形の鏡)に思いきり近づいてみましょ。するとそこには、宇宙のあらゆるものとの像<sup>イメージ</sup>が映しこまれていて見えるはずです。つまり、「わたし」や「あなた」だけでなく、それ以外のすべてのものの姿も見えるでしょ。

さらに、露に映つた像は、まわりにある無数の露に向けて何度も何度も放射されます。そうして、別の無数の露に映つた像もまた、まわりの無数の露に向けて放射されるのです。

つまり、このインドラの網のイメージは、生物であれ無生物であれ、そこに存在するものは、すべてこの無限の宇宙を構成する一部分である。それと同時に、その一部分には、この宇宙のあらゆるもののが含まれているということを表しているといえます。

この真理をわたしたち人間に限つて考えてみれば、他人<sup>あなた</sup>のなかにあるものはすべて自分のなかにもある。そして、自分のなかにあるものはすべて他人<sup>あなた</sup>のなかにもある、ということです。

賢治は『インドラの網』という作品のなかで、おたがいがおたがいと無限に関係しあつた世界を示しているのです。別の言い方をすれば、わたしたちみんながおたがいにつながつているということは、たとえそれがどんなものであれ、おたがいにおたがいの運命を共有せざるをえないということでもあります。また、どんなに小さなものであれ、どんなにささいなことであれ、あるものの存在や行動は、宇宙のあらゆるものに影響を与える、ということでもあります。

わたしたちは、肉体によつておたがいに物理的に切り離されていますが、「一時的で機械的に」

切り離されているだけです。実は、空間的、時間的にどんなに離れていても、わたしたちはおたがいの運命を共有しあい、おたがいに影響しあつて存在しているのです。

だから、

他人あなたが幸せになるまで、自分わたしは幸せになれない。

他人あなたが不幸であれば、自分わたしも不幸になる。

自分が不幸であれば、他人あなたも不幸になる。

賢治は、そう考えたのです。

「わたしやあなたが、いまここに存在している」という奇跡

今度は、逆のことを考えてみます。

もう一度、わたしたちのまわりに張りめぐらされたインドラの網のなかにある「露のしづく」をのぞいてみましょう。そこには、自分(わたし)のほかに、あなたも、それ以外のすべてのものもいつしょに映つていたはずです。つまり、自分(わたし)は決して孤独ではない、一個の「疎外された存在」ではないということがわかるでしょう。

だから、賢治の作品のなかの人物がどれだけ孤独に見えようとも、それはあくまでも表面だけのことにすぎないのでです。わたしもあなたも孤独ではありません。どんなに小さくても、わたしやあなたは森羅万象しんら ばんじょうのなかのきわめて大切な一部だからです。

しかし、というか、だからこそ、あなたの行動は、他のあらゆる人々、あらゆるものやできごとに影響を与えるということでもあります。同時に、他のあらゆる人々の行動は、あなたにも影響を与えるということです。

宇宙の絶対的な真理をこのように捉えるならば、「自分(わたし)、あるいは他人(あなた)がいまここに存在している」、つまり、「いま、ここに生きている」という現象(事実)は、まさに驚くべき「奇跡」である、とぼくは思います。

わたし、あるいはあなたは、いまこの瞬間、そしてこれから先の未来、永劫、宇宙のあらゆるものとできごとに影響を与えているからです。そして、いまここにわたしやあなたが存在しているのは、膨大な過去のできごとのつながりの、確かに揺るがぬ結果である、という奇跡でもあります。

「いま、ここに生きている」という意味をこのように捉えるならば、どんなささいなことであれ、どんな類たぐいのものであれ、悪いふるまいをすることがどんな結果を生むかがわかると思います。

そのことを理解すれば、人をいじめることもないでしよう。人を殺すこともないでしよう。必要ななく環境を破壊することもないでしよう。なぜなら、こうした行為は、結局はめぐりめぐつて、自分を滅ぼす行為になるからです。

賢治は、およそ一〇〇年前、その作品を通じて、すでにこのようなメッセージをわたしたちに送つていたのです。

## インドラの網

そのとき私は大へんひどく疲れていてたしか風と草穂との底に倒れていたのだとおもいます。

その秋風の昏倒(=目がくらんで倒れること)の中では私は私の錫いろの影法師にずいぶん馬鹿ていねいな別れの挨拶をやつていました。

そしてただひとり暗いこけももの敷物を踏んでツェラ高原を歩いて行きました。こけももには赤い実もついていたのです。

白いそらが高原の上いっぱいに張って高陵産(=中国の磁器の名産地)の磁器よりもつと冷たく白いのでした。

稀薄な空気がみんみん鳴っていましたがそれは多分は白磁器の雲の向うをさびしく渡つた日輪(=太陽)がもう高原の西を劃る(画する)黒い尖々の山稜の向うに落ちて薄明が来たためにそんなに軋んでいたのだろうとおもいます。

私は魚のようにあえぎながら何べんもあたりを見まわしました。ただ一かけの鳥も居ず、どこにもやさしい獸のかすかなけはいさえなかつたのです。

(私は全体何をたずねてこんな気圏(=大気圏)の上の方、きんきん痛む空気の中をある  
いているのか。)

私はひとりで自分にたずねました。

こけももがいつかなくなつて地面は乾いた灰いろの苔で覆われところどころには赤  
い苔の花もさいていました。けれどもそれはいよいよつめたい高原の悲痛を増すばかり  
でした。

そしていつか薄明は黄昏に入りかわられ、苔の花も赤ぐろく見え西の山稜の上そ  
らばかりかすかに黄いろに濁りました。

そのとき私ははるかの向うにまつ白な湖を見たのです。

(水ではないぞ、また曹達や何かの結晶だぞ。いまのうちひどく悦んで欺されたとき  
力を落しちゃいかないぞ。)私は自分で自分に言いました。

それでもやつぱり私は急ぎました。

湖はだんだん近く光つてきました。間もなく私はまつ白な石英の砂とその向うに音  
なく湛えるほんとうの水とを見ました。

砂がきしきし鳴りました。私はそれを一つまみとつて空の微光にしらべました。す  
きとおる複六方錐の粒だつたのです。

(石英安山岩か流紋岩から来た。)

私はつぶやくようにまた考えるようにしながら水際<sup>みずぎわ</sup>に立ちました。

（こいつは過冷却<sup>かれいきやく</sup>の（＝冷えすぎた）水だ。氷<sup>こおり</sup>相当官<sup>そうとうかん</sup>なのだ。）私はも一度<sup>いちど</sup>こころの中<sup>なか</sup>でつぶやきました。

全く私のてのひらは水の中<sup>なか</sup>で青じろく<sup>りんご</sup>く<sup>こく</sup>燐光<sup>りんこう</sup>を出していました。

あたりが俄<sup>にわか</sup>にきいんとなり、

（風だよ、草の穂<sup>ほ</sup>だよ。ごうごうごうごう。）こんな語<sup>ご</sup>が私の頭<sup>かしら</sup>の中で鳴りました。まつらでした。まつからで少しうす赤かつたのです。

私はまた眼<sup>め</sup>を開きました。

いつの間にかすっかり夜になつてそらはまるですきとおつていきました。素敵<sup>すてき</sup>に灼<sup>や</sup>きをかけられてよく研<sup>みが</sup>かれた鋼鐵<sup>こうてつ</sup>製<sup>せい</sup>の天の野原に銀河<sup>ぎんが</sup>の水は音なく流れ、鋼玉<sup>こうぎょく</sup>の小砂利<sup>こじやり</sup>も光り岸の砂も一つぶずつ数えられたのです。

またその桔梗<sup>ききょう</sup>いろの冷<sup>つめ</sup>たい天盤<sup>てんばん</sup>（＝空）には金剛石<sup>こんごうせき</sup>（＝ダイヤモンド）の劈開片<sup>へきかいへん</sup>（＝割れたかけら）や青宝玉<sup>せいほうぎょく</sup>の尖<sup>とが</sup>つた粒<sup>こい</sup>やあるいはまるでけむりの草のたねほどの黄水晶<sup>きすいしじゅう</sup>のかけらまでごく精巧<sup>せいこう</sup>のピンセツトできちんとひろわれきれいにちりばめられそれはめいめい勝手<sup>こきゅう</sup>に呼吸<sup>呼吸</sup>し勝手<sup>こきゅう</sup>にふりふりふるえました。

私はまた足もとの砂<sup>すな</sup>を見ましたらその砂粒<sup>すなつぶ</sup>の中<sup>なか</sup>にも黄いろや青や小さな火がちらちらまたたいているのでした。恐<sup>おそ</sup>らくはそのツエラ高原の過冷却<sup>かれいきやく</sup>湖畔<sup>こはん</sup>も天の銀河<sup>ぎんが</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>

と思われました。

けれどもこの時は早くも高原の夜は明ける、らしかつたのです。

それは空氣の中に何かしらそらぞららしい硝子の分子のようなものが浮んできたのでもわかりましたが第一東の九つの小さな青い星で囲まれたそらの泉水のようなものが大へん光が弱くなりそこの空は早くも鋼青から天河石(=美しい緑青色の宝石)の板に変つていたことから実にあきらかだつたのです。

その冷たい桔梗色の底光りする空間を一人の天(=天人)が翔けているのを私は見ました。(どうどうまぎれ込んだ、人の世界のツエラ高原の空間から天の空間へふつとまぎれこんだのだ。)私は胸を躍らせながら斯う思いました。

天人はまっすぐに翔けていた。

(一瞬百由旬を飛んでいるぞ。けれども見ろ、少しも動いていない。少しも動かずに移らずに変らずにたしかに一瞬百由旬ずつ翔けている。実にうまい。)私は斯うつぶやくように考えました。

天人の衣はけむりのよううすくその瓔珞(=宝石などで作られた装身具)は昧爽(=夜明けの頃)の天盤からかすかな光を受けました。

(ははあ、ここは空氣の稀薄が殆んど真空中に均しいのだ。だからあの纖細な衣のひだをちらつと乱す風もない。)私はまた思いました。

天人は紺いろいろの瞳<sup>ひとみ</sup>を大きく張<sup>は</sup>ってまたたき一つしませんでした。その唇<sup>くちびる</sup>は微妙<sup>かず</sup>に晒<sup>わら</sup>いました。けれども少しも動かず移らずまた変りませんでした。

(ここではあらゆる望<sup>のぞ</sup>みがみんな淨められていて。願<sup>ねが</sup>いの数はみな寂められていて。重力<sup>じゅうりょく</sup>は互に打ち消され冷<sup>つめ</sup>たいまるめろ(=香りの高いセイヨウカリンの木)の匂<sup>にお</sup>いが浮動<sup>ふどう</sup>するばかりだ。だからあの天衣<sup>てんい</sup>の紐<sup>ひも</sup>も波立たずまた鉛直<sup>えんちょく</sup>(=垂直)に垂れないのだ。)けれどもそのとき空は天河石<sup>てんがせき</sup>からあやしい葡萄瑪瑙<sup>ぶどうめのう</sup>の板に<sup>いた</sup>かわ<sup>かわ</sup>りその天人の翔ける姿<sup>すがた</sup>をもう私は見ませんでした。

(やつぱりツエラの高原だ。ほんの一時のまぎれ込みなどは結局<sup>けつきょく</sup>あてにならないのだ。)斯<sup>ス</sup>う私は自分で自分に誨<sup>おし</sup>える(=教える)ようにしました。けれどもどうもおかしいことはあの天盤のつめたいまるめろに似たかおりがまだその辺に漂<sup>なま</sup>つていてました。そして私はまたちらつとさつきのあやしい天の世界<sup>せかい</sup>の空間を夢<sup>ゆめ</sup>のように感じたのです。

(こいつはやつぱりおかしいぞ。天の空間は私の感覚<sup>かんかく</sup>のすぐ隣<sup>となり</sup>に居るらしい。みちをあるいて黄金いろの雲母<sup>うんも</sup>のかけらがだんだんたくさん出て来ればだんだん花崗岩<sup>かこうがん</sup>に近づいたなと思うのだ。ほんのまぐれあたりでもあんまり度々<sup>たびたび</sup>になるどとうとうそれがほんとになる。きっと私はもう一度この高原で天の世界<sup>せかい</sup>を感じることができる。)私はひとりで斯<sup>ス</sup>う思いながらそのまま立つておりました。

そして空から瞳を高原に転じました。全く砂はもうまつ白に見えていました。湖は緑青よりももつと古びその青さは私の心臓まで冷たくしました。

ふと私は私の前に三人の天の子供らを見ました。それはみな霜を織つたような羅(=透けて見えるような薄い織物)をつけすきとある沓(=靴)をはき私の前の水際に立つてしまりに東の空をのぞみ太陽の昇るのを待つていていました。その東の空はもう白く燃えていました。私は天の子供らのひだのつけようからそのガンダーラ系統などを知りました。またそのたしかに于闐大寺の廐趾から発掘された壁画の中の三人なことを知りました。私はしづかにそつちへ進み愕かさないようじごく声低く挨拶しました。

「お早う、于闐大寺の壁画の中の子供さんたち。」

三人一緒にこつちを向きました。その瓔珞のかがやきと黒い厳めしい瞳。

私は進みながらまた云いました。

「お早う。于闐大寺の壁画の中の子供さんたち。」

「お前は誰だい。」

右はじの子供がまっすぐに瞬もなく私を見て訊ねました。

「私は于闐大寺を沙(=砂)の中から掘り出した青木晃というものです。」

「何しに来たんだい。」少しの顔色もうごかさずじつと私の瞳を見ながらその子はまた一云いました。

「あなたたちと一緒にお日さまをおがみたいと思つてです。」

「そうですか。もうじきです。」三人は向うを向きました。瓔珞は黄や橙や緑の針のようなみじかい光を射、羅は虹のようにひるがえりました。

そして早くもその燃え立つた白金のそら、湖の向うの鶯いろの原のはてから熔けたようなもの、なまめかしいもの、古びた黄金、反射炉の中の朱、一きれの光るもののが現されました。

天の子供らはまっすぐに立つてそつちへ合掌しました。

それは太陽でした。厳かにそのあやしい円い熔けたようながらだをゆすり間もなく正しく空に昇つた天の世界の太陽でした。光は針や束になつてそぞぞそぞらいちめんかちかち鳴りました。

天の子供らは夢中になつてはねあがりまつ青な寂静印(=悩みや苦しみの消えた象徴)の湖の岸珪砂の上をかけまわりました。そしていきなり私にぶつかりびっくりして飛びのきながら一人が空を指して叫びました。

「ごらん、そら、インドラの網を。」

私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変つたその天頂から四方の青白い天末(=空の端)までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その纖維は蜘蛛のより細く、その組織は菌糸(=非常に細い糸)より緻密に、透明清澄で黄金でまた青く幾億互に交錯し

光つて顛ひるがえて燃えました。

「ごらん、そら、風の太鼓。」も一人がぶつつかつてあわてて遁にげ（＝逃げ）ながら斯こう云いいました。ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうようになくらく暗くらく藍あいや黃あ金や緑きりや灰はいろに光り空から陥おちちこんだようになり誰だれも敲たたかない（＝叩かない）のにちからいっぱい鳴つていて、百千のその天の太鼓は鳴つていながらそれで少しも鳴つていなかつたのです。私はそれをあんまり永ながく見て眼も眩くらくなりようよろしました。

「ごらん、蒼孔雀あおくじやくを。」さつきの右はじの子供こどが私と行きすぎるときしずかに斯こう云いました。まことに空のインドラの網のぞのむこう、数かずらす鳴りわたる天鼓てんこのかなたに空一ぱいの不思議ふしきぎな大きな蒼い孔雀あおくじやくが宝石製ほうせきせいの尾おばねをひろげかすかにクウクウ鳴きました。その孔雀はたしかに空には居おりました。けれども少しも見えなかつたのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかつたのです。

そして私は本統ほんとう（＝本当）にもうその三人の天の子供こどらを見ませんでした。

却かえつて私は草穂くさほと風の中に白く倒たおれている私のかたちをぼんやり思い出しました。



# 現実をしつかり観察し、理解せよ——『雨ニモマケズ』

尊い行いとは何かを考えることこそ、人間の本質である

ぼくはこの章の締めくくりに、『雨ニモマケズ』という賢治の最も有名な詩を選びました。なぜなら、この詩は自分自身（と、ひいては地球上のわたしたちみんな）に対する賢治の熱い想いを最もわかりやすく示している、と信じているからです。

『春と修羅』という連作詩集のすぐれた「序」でも、賢治は自分自身を説明しています。まさに、その「序」は「わたくしといふ現象」という表現で始まっているのです。

ぼくは『英語で読み解く宮沢賢治の世界』（岩波ジュニア新書）という本のなかで、この「序」をくわしく分析しました。でもぼくは、それよりもつとわかりやすい『雨ニモマケズ』で、この章を締めくくりたいと思います。

ところで、ぼくの大好きな賢治の物語の一つに『学者アラムハラドの見た着物』があります。

この章であつかった他の物語と同じように、この作品の舞台はインドです。主人公アラムハラドは学者で、森のなかの塾で生徒にさまざまな知恵を教えていきます。ここでも、アラムハラドは、森のなかの教師「宮沢賢治」の「もうひとりの自分」です。

ちなみに、賢治が花巻に設立した農民たちのための私塾、「羅須地人協会」の「羅須」とは、

ポーランド語で「森(las)<sup>ラス</sup>」の意味です。賢治はここから協会の名前をとつてきたにちがいありません。

「『何と云はれても』／『胸はいま』」の項(P.39)で述べたように、賢治がいつも自分に問いかけていたのは、「『わたし』とは何か」という命題でした。

アラムハラドには、タルラというお気に入りの生徒がいました。アラムハラドはタルラにこうたずねました。お前にとつて、自分の両足よりも大事なものはあるのか、と。タルラはこう答えました。両足を切ることで人々を飢饉から救えるのなら、喜んで両足をくれてやりましょう、と。

そこで、アラムハラドは生徒に、賢治のこの命題の核心にあたるような質問をします。

小鳥が啼かないで、いられず魚が泳がないで、いられないように人はどういうことがしないでいられないだろう。人が何としてもそうしないで、いられないことは一体どういう事だろう。考えてごらん。

この問い合わせて、賢治は作品のなかの生徒の口を借りて、こう答えます。

人はほんとうのいいことが何だかを考えないで、いられないと思います。

この答えに対し、師のアラムハラドが言います。

人は善を愛し道を求めるないでいられない。それが人の性質だ。

つまり、<sup>よ</sup>善い行い、尊い行いについて考えるのは人間の「性」だ、ということです。それは、鳴くことが鳥の「性」であり、泳ぐことが魚の「性」であるのとまったく同じです。善い行いに<sup>ネイチャー</sup>ついて考えることはわたしたちの「本質(nature)」や「人間性(human nature)」なのです。

これが「自己」の意味、すなわち「『わたし』とは何か」という問いに対し、賢治が到達した結論にちがいありません。

悪はこの世界からならぬ。でも、善によつて取り消すことができる。

この章で見てきた大切なことのひとつは、「わたし」というものは自然の森羅万象から切り離されたものではなく、むしろ自然の一部であり、それと密接につながつていろいろのだ、という賢治のメッセージです。そして、わたしたちの想像力こそが、この真理を導いてくれる「媒体」(つまり「教師」)なのだ、というメッセージです。

このよう理解すれば、わたしたちは、鳥が鳴かないでいられないように、魚が泳がないでいられないように、善や愛情という人間の最も大切な感情にもとづいて人生を他人にきき上げられるようになるでしょう。そして、無私の心さえ持てるようになるかもしません。

わたしたちは心を開いて他人を助けられるようになるでしょう。そして、このことはわたしたち

ちひとりひとりの人生に「生きがい」を与えてくれるにちがいありません。その結果、わたしたちは自分の「ナリタイモノ」になれるのです。

「わたし(自分)」とは何か、「あなた(他人)」とは何かという問い合わせに対し、賢治がどのような答えを出そうとしたのかを考えてきたこの章の最後に、こう結論できると思います。

人間は本質的に善い存在である。

もちろん、この世には悪が存在します。悪はこれまでずっと存在してきたし、これからもずっと存在し続けるでしょう。賢治の作品にも、しょっちゅう悪がその醜い顔をのぞかせます。しかし、賢治は決して悪から目をそむけようとはしません。

むしろ、賢治は悪をしっかりと見すえ、それをわたしたちや世界の「不可欠な」一部として捉えます。賢治はそう認識したうえで、わたしたちは悪を否定したり、善で取り消したりできる、と考えたのです。

でも、わたしたちは両足を切り落としたり、『銀河鉄道の夜』のサソリのように身体を燃やしたりする必要はありません。自分の一部、つまり時間や愛情やわずかなお金といったものを、身近な人だけでなく、見知らぬ人にも分けてやりさえすればよいのだ。賢治はそう言っているのだと思います。

たとえそうしたとしても、自然にもともと存在するものであれ、人があとから作り出したものであれ、悪が滅ぶことはないでしょう。しかし、こう行動することで、悪を善で取り消す可能性が生まれてきます。

『雨ニモマケズ』は日本で最も有名な現代詩の一つです。それはこの章の終わりにふさわしいだけではなく、この第一章と次の第二章をつなぐ架け橋にもなっています。

この架け橋は、この詩のちょうど真んなかあたりの一二行にあります。そして、その一二行こそが、この詩全体を支える柱、あるいは中心軸になっていると思います。そこには、こう書かれています。

アラユルコトヲ

⋮⋮⋮

ヨクミキキシワカリ

見聞き 分かり

たつたの十六字です。

でも、この十六字で、賢治はわたしたちにとても大切なもう一つのメッセージを伝えています。それは、ほんとうに「自然とつながつて生きる」ためには、わたしたちは想像力だけでなく、知識や経験、目の前のあるゆるものやできごとにに対する鋭い観察力をも働かせなければならない、というメッセージです。

それでは、『雨ニモマケズ』をお読みください。

## 〔雨ニモマケズ〕

雨ニモマケズ  
風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ  
丈夫ナカラダラモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ(=怒らず)

イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ラタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカソジヨウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ  
小サナ萱<sup>かや</sup>ブキノ小屋ニヰテ  
東ニ病氣ノコドモアレバ  
行ツテ看病シテヤリ  
西ニツカレタ母アレバ  
行ツテソノ稻<sup>いな</sup>ノ束ヲ負ヒ  
南ニ死ニサウナ人アレバ  
行ツテコ<sup>ニ</sup>ハガラナクテモイヽトイヒ  
北ニケンクワヤソシヨウガアレバ  
ツマラナイカラヤメロトイヒ  
ヒドリノトキハナミダラナガシ  
サムサノナツハオロオロアルキ  
ミンナニデクノボートヨバレ  
ホメラレモゼズ  
クニモサレズ  
サウイフモノニ  
ワタシハナリタイ

賢治から、あなたへ  
ロジャー・パルバース著 森本奈理訳

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社  
定価 1,700 円 (本体) + 税  
ISBN 978-4-7976-7241-1

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)